

申圭植の民族独立運動と大倭教―大韓民国臨時政府における活動を中心に

佐々 充 昭

はじめに

一九一〇年の韓国併合後、朝鮮総督府の統治下で朝鮮人は自由な政治活動を行うことができなくなった。そのために宗教活動を通じて、朝鮮人としての民族意識の涵養や民族独立運動が密に行われた。民族独立運動を展開した宗教としては天道教やキリスト教が夙に有名である。一九一九年に起こった挙国的な三・一運動において、独立宣言書に署名した三三人の民族代表者のうち、第三代教主・孫秉熙を含む一五人が天道教徒、一六人がキリスト教徒、二名が仏教徒であった。このような事実からも、植民地期朝鮮において宗教がいかに深く民族独立運動と結びついていたか確認することができる。

そして天道教やキリスト教以外にも、民族独立運動に大きな影響を及ぼした宗教がある。それは大倭教である。大倭教は古朝鮮の建国神話に登場する「檀君」を朝鮮民族の始祖神として崇奉する宗教団体であり、一九〇九年二月五日（旧暦一月一日）に独立運動家の羅喆によつて創設された^①。創設当初は檀君教と称したが、朝鮮総督府の弾圧を避けるために、韓国併合が行われた一九一〇年に教団名称を大倭教に改称した^②。大倭教は、檀君を精神的求心点として朝鮮人の民族意識を高揚させることを目的とする宗教であり、民族独立運動団体としての性格を強く帯びていたために朝鮮総督府の厳しい監視と弾圧を受け

た。そのために羅喆は、一九一四年に教団本部を中国吉林省和龍県三道溝（白頭山の北麓）に移転させて抗日独立運動を展開していった。

一九一九年に起こった三・一運動の後、中国上海の地に大韓民国臨時政府（以下、臨政とする）が樹立された際も、大倭教は背後支援団体として大きな役割を果たした。臨政の創設に関しては、キリスト教徒が重要な役割を担ったことが知られている。実際、李承晩や安昌浩など米国で独立運動を展開していたキリスト教徒が、臨政運動の中で中軸的な働きをなした。また、キリスト教徒の呂運亨を中心に一九一〇年代の上海で創設された新韓青年団が、臨政設立に大きく寄与したことが知られている。新韓青年団の団員で、一九一九年一月に開催されたパリ講和会議に派遣されて、列強諸国に朝鮮の独立を訴えた金奎植もキリスト教徒であった。

その一方で、大倭教も臨政の活動において重要な役割を果たした。これに関しては大倭教研究者によつて多くの研究成果が出されており、特に大倭教徒の申圭植（一八八〇―一九二二、号は晩観）が臨政創設の中心メンバーであったことが明らかにされている^③。申圭植は一九一〇年代に設置された大倭教の上海支部を主導しながら、中国革命派との交流を通じて臨政の基礎を築いた。近年、臨政に関する研究が進展する中で、歴史学分野においても臨政との関係に注目した申圭植研究が盛んに行われている^④。筆者も大倭教が抗日独立運動に及ぼした影

響を調査する過程で、臨政創設時における申圭植の活動について論じた研究を発表してきた。⁵⁾これらの研究成果をもとに、本稿では大隈教徒としての申圭植の経歴を辿りながら、申圭植が中国の革命運動家たちと連携しながら臨政創設に尽力した過程について考察する。

申圭植と中国の革命運動家たちとの関係については、申圭植が臨政代表者として孫文と会談を行い、広東軍政府（中国護法政府）と相互承認を行ったという記録が残されている。当時、申圭植の秘書を務めていた閔弼鎬（一八九八―一九六三、号は石麟）が著した『中韓外交史話』という回顧録である。⁶⁾これは孫文・申圭植会談に直接参加した当事者による唯一ともいえる資料であり、韓国の歴史研究者の多くはこの資料を根拠として、一九二一年に臨政と中国護法政府との間で相互承認が行われたと見なしてきた。これに対して、狭間直樹は、孫・申会談日が不正確である点と、下関条約に対する孫文の発言内容が朝鮮独立運動側の見解によって本来の内容と変えられているのではないかと、といった問題点を提起した。⁷⁾この問題提起を受けて、森悦子は中国側の資料を検討しながら、『中韓外交史話』には事実とは異なる点があることを指摘し、その信憑性について再検討の必要性があると論じた。⁸⁾森の研究は、当時刊行されていた中国新聞などの資料を精査した重要な研究であるが、孫文の動向を中心に考察されたものであり、申圭植に関しては部分的な検討にとどまっている。とりわけ森の研究では、申圭植が大隈教徒であった事実に至った背景にまったく触れておらず、申圭植が孫文と会談するに至った経緯やその背景に関する検討が十分に行われているとは言えない。以上のような観点から、本稿では、大隈教団内における申圭植の活動を辿りながら、申圭植が臨政代表者として中国護法政府の代表である孫文と会見するに至った経緯と背景について明らかにする。

一・申圭植の大隈教入信

申圭植の本貫は高霊であり、中枢院議官を務めたこともある父・申龍雨と母・全州崔氏の二男として、一八八〇年二月二二日（陰暦一八七九年一月一三日）に忠清北道文義郡東面桂山里（現在の清州市上党区佳徳面）に生まれた。⁹⁾高霊申氏は、朝鮮時代の世宗代に領議政をつとめた申叔舟の末裔で、その最大門中が居住する村は清州の上党山城の東側にあったために山東申氏とも称した。この門中は多数の開化人士を輩出したことで知られている。特に申圭植と申采浩（一八八〇―一九三六、号は丹齋）、申伯雨（一八八九―一九六二、号は畊夫）¹⁰⁾の三人は、幼少期から「山東三才」としてその噂がソウルに届くほど優秀であったと言われている。

幼少期に漢学を修学した申圭植は、結婚を機に一八九七年に上京し、一八九八年にソウルの官立漢語学校に入学した。同校では中国語や各国の歴史・地理などを学んだが、一八九八年後半に独立協会運動と関連した万民共同会の討論会に参加したために卒業はできなかった。その後、申圭植は軍人としての道を歩んだ。一九〇〇年（二〇歳の時）に陸軍武官学校に入学し、一九〇二年に卒業して大韓帝国の陸軍歩兵参尉に任官された。一九〇三年に大韓帝国軍の鎮衛隊で研修を受け、さらに参尉として鎮衛隊や侍衛隊で勤務した。その期間中、和陵参奉や丁字閣改修の監督などをつとめている。一九〇六年に正三品となり、侍衛隊第三大隊に配属されて副尉に昇進した。

その間、申圭植にとって悲劇的な事件が起こった。一九〇五年一月に第二次日韓協約が締結されて大韓帝国が日本の保護国となったのである。これを知った申圭植は義兵を募って反対運動を起こそうとしたが失敗した。この時、申圭植は飲毒自殺を図ったが、幸いなことに

家族がいち早く発見して一命をとりとめた。しかし、この時に服用した薬の効果が強かったために視神経を痛めて、右目の視力を失い正面を向かずに斜めになる障害を負ってしまった。この時から、「(日帝を)横目でにらみつける」という意味で「睨観」という号を使うようになった。さらに一九〇七年七月に高宗が強制退位させられ、新しい皇帝として純宗が即位した。その際、第三次日韓協約が締結され、大韓帝国の軍隊が解散された。この処置に憤慨した申圭植は、義兵隊を組織して武装蜂起を試みようとしたが、この計画も失敗に終わった。

その後、申圭植は愛国啓蒙運動に関わった。大韓協会や畿湖興学会などの団体に加入し、国権回復のための啓蒙活動に尽力した。大韓協会では一九〇八年九月に実業部の部員に選出されたほか、会報誌である『大韓協学会報』に独立心を喚起させる詩を投稿した。畿湖興学会の創設時にも会員として加入し、当時としては多額の一千円を寄付した。その傍らで、国力増強のための殖産興業を目的に、退職将校一〇名を糾合して一九〇七年九月に皇城鉉業株式会社を設立した。また一九〇八年に設立された工業研究会の後援者となった。この研究会は、組織的な工業研究の必要性を自覚した官立工業伝習所の学生一二七名が中心となり、朴賛翊を会長として設立されたものである。申圭植は工業研究会を全面的に支援し、同会が発行する月刊紙『工業界』の社長兼編集部長をつとめた。同会の初代会長に選出された朴賛翊は、これを機に申圭植と昵懇の仲となり、後に大倥教に入信して中国へ渡り、朝鮮民族独立運動に尽力していくことになる。

その後、申圭植の人生を大きく変える出来事が起こった。一九一〇年八月二九日の韓国併合である。帝国日本に国家主権を侵奪されるという現実直面して、申圭植は義憤に堪えきれず、再び服毒自殺を図ろうとした。しかし、この時は大倥教教主の羅喆によって引き留めら

れて、死を免れた。大倥教(檀君教)は一九〇九年二月に創設されたが、申圭植は草創期の頃に大倥教(当時は檀君教)に入信し¹⁾、これを機に大倥教の信仰に専心するようになった。大倥教に入信した後、彼は名前を「申櫻」に変え²⁾、「韓民族の復興は必ず大倥教の発展に係っている」(『伝記』一三三頁)と考えて熱心な信徒となった。一九一一年一月に知教の位階に昇秩し³⁾、大倥教本部の経理部長と宗理部長を歴任した。

その後、申圭植は海外亡命を決意して中国の上海に渡った。亡命時期は一九一一年三月から四月の間と考えられている。申圭植は官立漢語学校で中国語を習得しており、その経歴を生かして中国へ渡ったのである。また、ちょうどその頃、大倥教は朝鮮総督府の弾圧によって大きな困難に直面しており、羅喆は一九一四年に教団本部を中国吉林省和龍県三道溝青湖(白頭山北麓の地)に移転させた。その際、中国の上海に西道本司という支部が設けられたが、申圭植はその主管者に任命された(『六十年史』一八四頁)。このことから分かるとおり、羅喆は申圭植に対して深い信頼の念を持っていた。羅喆は総督府の大倥教弾圧に抗議して、一九一六年陰暦八月一日に黄海道九月山三聖祠で自決した。その時、数多くの遺書を残した。その中で「殉命三条」「伝授道統文」「密諭」「恭告教徒文」「遺誠葬事七条」を書き、従者の嚴柱天に命じて申圭植に直接手渡すようにさせた⁴⁾。また、羅喆の遺骸は白頭山麓にある大倥教総本司付近に埋葬されることになり、一九一六年一月二四日(陰暦十一月二〇日)に同地で奉藏礼式がとり行われた。この礼式に申圭植も参加している⁵⁾。

一九一〇年代の上海における朝鮮人の人口は数百人程度であり、一九一九年の三・一運動と臨政樹立の時期には一〇〇〇人以上に達したと推定されている。また、上海在中朝鮮人の宗教についてみると、キ

リスト教の信者が最も多かった。一九二〇年代この地域の七〇%がキリスト教徒であった。大倂教と天道教は、二〇名程度の信徒を有していたとされている。¹⁶キリスト教の場合、一九一四年一〇月に寓滬韓人礼拝会という集まりを組織し、定期的に週末礼拝を行っていた。大倂教の場合、申圭植を中心に上海に設けられた西道本司で集会が行われていた。申圭植はどこに住むにあつても、常に一幅の檀君肖像画と朝鮮の地図を室内に飾り、朝晩必ず檀君の肖像画に向かつて香を焚き、礼拝をしながら黙々と祈祷を捧げ、祖国光復を祈っていたとされる(『伝記』一一七頁)。西道本司には朴殷植・趙琬九・金白淵・白純・朴賛翊・鄭信などの信徒が所属していたが、彼らは申圭植を中心に毎週日曜日に集まって敬拝式をとり行い、御天節(陰暦三月一五日に行われる檀君昇天祭)、開天節(陰暦一〇月三日に行われる檀君降誕祭)には盛大に慶賀式を挙行し、国恥記念日(韓国併合が行われた八月二九日)には、沈痛なる雰囲気の中で記念式を挙行した(『伝記』一三三頁)。

しかしながら、一九二二年になると申圭植は健康を害して病院に入院した。大倂教の教団史である『六十年史』には、一九二〇年代初めに作成されたと考えられる各種の名簿が載せられている。それを見ると、西一道本司に所属する信徒として「尹世復〔典理、尚教〕、李億〔典理、尚教〕、趙範〔施教員、知教〕」とあり、西一道第一支司の所属として「崔南表〔典事代辦、参教〕、尹光源〔賛事代辦、参教〕」、西二道本司の所属として「朴殷植〔典理、尚教〕、趙琬九〔宣理部領、尚教〕、金科奉〔宣講部領、尚教〕」とある(『六十年史』九七三頁)。また、一九二〇年一〇月から一九二一年一月の間に、上海の福煦路愛仁里に滬光施教堂が新たに設置された。『六十年史』をみると、滬光施教堂の所属信徒として「閔濟鎬・典務、参教、叙任」「壬戌(一九二二年)九月四日」、金徳鎮・賛務、奉戒、叙任「壬戌九月四日」、申桓・

賛務、兄弟、叙任「壬戌九月四日」と記されている(『六十年史』一〇〇〇頁)。ここに記されている閔濟鎬は、閔弼鎬の実兄であり、申桓は申圭植の実弟である申健植(一八八九―一九六三、号は三岡)の教名である。このように大倂教団内の記録には、一九二二年頃の西道本司の管理者に申圭植の名前があがっていない。これは健康上の理由によるものであり、上海地域における大倂教の主導者は申圭植である点には変わりがなかったと考えられる。

二・一九一〇年代における申圭植の民族独立運動

上海における申圭植の活動において、特に注目すべきなのは中国の革命運動家との交流である。申圭植は中国革命の成功が朝鮮の解放と独立につながると考えて、中国革命派人士との交流を積極的に試みた。上海に到着した直後、申圭植は革命派の雑誌である『民立報』の記者であった徐天復(徐血児)と交際するようになり、これをきっかけに軍事指導者の黄興(黄克強)、上海都督であった陳其美(陳英士)、中国同盟会の指導者である宋教仁、『民権報』の編集者である戴季陶、『大公報』主筆の胡漢民、外交専門家の伍廷芳・吳鐵成・居正などと面識を持つに至った。

このような交流を通じて、申圭植は自ら中国革命のために献身的な活動を行った。『伝記』によると、胡漢民・宋教仁・戴季陶らが上海で『民権報』を発行する時、亡命の旅費として持参した全財産を惜しまなく寄付して信頼を得たという逸話が記されている(『伝記』一二八頁)。さらに申圭植は中国同盟会に加入し、上海で同会の中部総会を率いていた陳其美と共に一九一一年の武昌蜂起に参加した。そして辛亥革命の成功後、申圭植は一九一二年四月中旬頃、上海に到着した孫

文と直接面会することができた。また一九一三年七月に袁世凱の独裁政治に反対して起こった第二次革命の際にも、申圭植は陳其美と共に参加した。一九一四年には外国人としてただひとり中国革命派の文学団体であった南社に加入し、中国の文人たちと幅広い交流を持った。

申圭植は、特に宋教仁や陳其美と深い友誼を結んだとされる。一九一三年袁世凱によって宋教仁が暗殺された時には、三日間断食して哀悼の意を表した。また陳其美は、申圭植と「頃心相助、日夜分憂」するほどの間柄となり、朝鮮独立に対する深い理解を示して、物心両面にわたって申圭植を援助したとされる。後に陳其美が暗殺されると、申圭植自身が当時北京政府から厳しい監視を受けていたにもかかわらず、危険を冒して駆けつけ葬儀に参列した。このような交友関係を通じて、申圭植は中国の革命運動家から様々な支援を得ることができた。一九一〇年代の前半から、申圭植は袁世凱政府と駐上海日本領事警察から懸賞金付きの指名手配を受けたが、その際、上海都督である陳其美は彼のための避難所としてフランス租界地の魚陽里に二階建ての家を斡旋した。ここが後に、朴殷植など朝鮮亡命人士たちの留宿所となり、上海における朝鮮独立運動の拠点となった。

辛亥革命の成功後、朝鮮人独立運動家の中には孫文を慕って中国への渡航を決意した者が数多くいた。彼らは、申圭植が築いた独立運動の基盤を頼って上海に集まり始めた。こうして上海入りした独立運動家たちと共に、申圭植は一九一二年七月（陰暦五月二〇日）に同済社を結成した¹⁸。同済社の名前は「同舟共済〔同じ舟で共に救う〕」を略したものであり、同胞たちの相互扶助機関という意味であるが、国権回復と民族独立を目指す団体でもあった。組織については本部と支社を置き、本部は上海に、支社は北京・天津・東北部などの中国各地と欧米・日本に設置された。本部には理事長と総裁を置き、支社には社

長と幹事を置いたことがわかっている。組織は徐々に拡大し、全盛期には加入会員が三〇〇余名に達するほどであった。

同済社の理事長は申圭植、総裁は朴殷植がつとめた。同済社の代表と運営を担った申圭植と朴殷植が大宗教の幹部（教秩は尚教）であったことから分かれるとおり、同済社に所属した中心会員は大宗教の信徒か、あるいは大宗教の理念に賛同した者たちであった。同済社が大宗教といかに深く結びついていたかは、一九一七年の陰暦三月一日（檀君が昇天したとされる御天節の日）に、同済社の社員と大宗教徒および学生らによる連合団体が大宗教初代教主・羅喆の追悼式を厳粛に挙行していることから確認できる¹⁹。この団体は秘密結社であったために詳細な記録は残されていないが、同済社に加入した会員として、金奎植・申采浩・洪命熹・趙素昂・文一平・朴賛翊・曹成煥・申健植・金容鎬・申澈・閔済鎬・金甲・鄭桓範・金容俊・閔忠植・李賛永・金永武・李光・申錫雨・韓震山（韓興教）・金昇・金徳・卞栄晩・尹潜善・閔弼鎬・呂運亨・鮮于赫・徐丙浩・趙東祐・鄭元鐸がいたことが分かっている。彼らは後に抗日独立運動の中心人物として活躍した。

同済社の社員の中で特に注目したいのは、総裁をつとめた朴殷植の他に、申采浩がその中に入っていた点である。周知の通り、朴殷植と申采浩は近代朝鮮を代表する歴史学者であり、両者共に旧韓末期から檀君ナショナリズムを唱道した民族主義史学者として知られている。

この頃、上海に滞在していた洪命熹によると、申圭植は生活すらままならない状況にあった申采浩をウラジオストクから上海に連れてきた。この時、「睨視は上海の朝鮮人の中で中心人物であった」と回想している²⁰。申圭植と申采浩は高霊申氏の同じ門中であることから、申采浩は申圭植を頼って上海へ渡ってきたと考えられる。参考までに言う、朴殷植は上海で『韓国痛史』『李舜臣伝』『安重根伝』『朝鮮独

立運動之血史』等の書籍を刊行した。これらの書籍は、中国の革命運動家たちの支援のもとに出版されたものであった（『伝記』一二八～九頁）。

その後、申圭植は、同済社の協力団体として新亜同済社を組織した。朝鮮の独立運動と中国の革命運動を結び付け、両国の友誼を深めて相互協力を行おうとするのが目的であった。秘密結社であったために正確な設立時期は分かっていないが、陳其美が監督をつとめ、宋教仁・胡漢民・廖仲愷・鄒魯・戴季陶・陳果夫・徐謙・張伝泉（張繼）・屈映光・呉鐵城・殷汝驪・張季鸞・胡霖・柏文蔚・呂天民・唐紹儀・唐露園・黄介民・楊春時・張静江らが会員であったとされる（『伝記』一二八頁）。彼らの多くは南社の構成員であり、孫文が組織した中華革命党の運動家であった。この団体について、陳其美の甥であり中国国民党の有力者であった陳果夫は次のように回顧している。「叔父は朝鮮人の某々と秘密結社を組織した。その名は新亜同済社であった。ただ朝鮮の独立のためであった。叔父はこの結社の監督となり、物質的・精神的な支援を行った。このことは極めて秘密裏に進められ、私も叔父が語ったことを聞いただけで、その名称も知らなかった。民国一五年（一九二六年）になってようやく朝鮮の友人らに探りを入れて知った」⁽²¹⁾。

さらに、申圭植は一九一三年頃に環球中国学生会に加入し、李登輝・唐文治・王培蓀・余日奇・朱家驊らと交流する機会を得た。この学生会は、李登輝が一九〇五年に中国留学生の就業を斡旋するために発起した組織であり、一九一四年以降は朱家驊が責任者となった。中国人が組織したこの学生会に刺激されて、申圭植は一九一三年一二月に上海フランス租界の明德里に博達学院を設立した。この学院は、環球中国学生会の機構にならったものであり、中国や欧米に留学を希望

する朝鮮人青年のための予備学校として設置された。日本の植民統治下において、朝鮮総督府は、統監府時代の一九〇六年に制定された「旧韓国留学生規程」を「朝鮮総督府留学生規程」として改訂し、朝鮮人の海外留学を極力制限した。そのために海外留学を希望した朝鮮人青年は、当時、ビザ無しで滞在できた上海の租界地（特に国際租界とフランス租界）に流入して留学の機会をうかがったのである⁽²²⁾。このような朝鮮人学生に、まず留学に必要な語学力と基礎学力を身につけさせるために設立されたのが博達学院であった。

博達学院の教育機関は一年半で、教科目は英語・中国語・地理・歴史・数学などが教えられ、朴殷植・申采浩・洪命熹・文一平・趙素昂・曹成煥らと、中国人・農竹と米国籍の華僑・毛大衛などが教師として参加した。この学院は結局、三期までしか続かなかったが、一九一六年に閉鎖されるまで一〇〇名以上の卒業生を輩出し、その中には中国の大学や欧米の学校へ留学した学生もおり、彼らの学費支援も行った（『伝記』一三〇頁）。一九一三年初めから翌年秋まで上海に滞在していた鄭元澤の日記によると、同済社は上海と南京地域の朝鮮人留学生を主要な人的基盤としていた。申圭植・金奎植・洪命熹・鄭寅普・文一平などが頻繁に往来し、両地域の留学生を指導した。また、彼らは同済社総会および創立記念式、博達学院開校式、洪範植（一八七〇～一九一〇、一九一〇年の韓国併合時に自決した人物）や安重根義士の追悼会などを開催したと記されている⁽²³⁾。このことから、博達学院は同済社の付属機関としての性格を持つ学校であったことが分かる。

同済社や博達学院は秘密結社であったために資料が残されておらず、詳細は分からないが、それに関わった当事者たちの証言がいくつか残されている。博達学院に入學した朝鮮人学生の中で、閔弼鎬は特に注目すべき人物である。閔弼鎬が申圭植と関係を持つようになった

のは、兄の閔済鎬に従って中国上海へ亡命し、兄の紹介で申圭植と会った時からである。『六十年史』によると、滬光施教堂の信徒として「閔済鎬…典務、参教、叙任「壬戌（一九二二年）九月四日」と記されていることから、大倣教のネットワークを通じて、大倣教徒の閔済鎬が弟の閔弼鎬を申圭植に紹介したものと考えられる。その後、閔弼鎬は申圭植の斡旋で同済社に入社し、博達学院で教育を受けた。閔弼鎬の長男である閔泳秀²⁴は、父の閔弼鎬から直接聞いた話として次のように伝えている。

中国へ亡命してきた青年たちは、睨観（申圭植）先生が組織した同済社に入社し、また博達学院に通った後、大部分は睨観の紹介と推薦・援助で中国の大学や軍官学校またはヨーロッパやアメリカへ留学した。父（閔弼鎬）は南洋公学に通い、電信学校（上海遞信学校）へ入学し、卒業後に電信局の公務員となったが、そこに行くようになったのはやはり申圭植先生の指示に従った選択であった。南洋公学は英語を重視する学校であったために推薦された。（申圭植先生は）独立運動をするためには経済的な生活を解決しなければならず、そのためには技術に慣れなければならないと強調された。それに従って、「父は」中国の交通部傘下の電信学校へ志願した。申圭植先生の望まれた通り、父は卒業後に就業はもちろん、後日、日本文書の暗号解読に大きな功を立てた。…父は中国の公務員（中国国民政府交通部電報局に勤務した…引用者）となったが、我が臨時政府の連絡や後に日本と戦う蒋介石政府の軍事委員会の侍従室（暗電研究所総務として従事した…引用者）で、日本の専門暗号を解読して大きな寄与をされた。これを見ると、外祖父（申圭植）がどのような意図をもって電信学校に入学させたのか推察することができる。²⁵

これに関して、閔弼鎬自身も『伝記』の中で次のように述べている。「（申圭植）先生は青年が訪ねてくると、食事と宿所を準備し、青年が学校に入学すると学費を用意してやり、青年が留学へ行くと旅券の入国手続きを面倒見てあげ、さらには彼らの学費を納入し、本を買い、その他のあらゆる手続きを終えたのを見た後にやっと安心した」（『伝記』一三二頁）。後に閔弼鎬は一九二〇年七月に申圭植の娘・申明浩と結婚し、申圭植の秘書役をつとめた。

博達学院の実態について詳細なことはわかっていないが、英語や中国語といった語学の実践教育の他、大倣教が目標とした朝鮮人としての民族意識を覚醒させるための歴史教育も行われていたと考えられる。そもそもこの学院の名称である「博達（박달…パクトル）」は、大倣教が唱道した檀君時代の国名である「배달（ペダル、漢字表記は「倍達」）にちなんだものであった。大倣教では、東北アジアで活動したあらゆる民族・部族を総称した「倍達族」という新しい民族観念を提唱した。「倍達」とは朝鮮語の古語で「배달（ペダル）」という音を漢字に直したものであり、「배」は「祖」や「父」を意味し、「달」は「光」を意味するとされた（『檀君教佈明書』「六十年史」八六頁）。²⁶また、「배달（ペダル）」の別の漢字表記として「博達」や「朴達」が使用されることもあり、これらは檀君が降臨したとされる太伯山檀木の名前であると解釈された（『六十年史』五〇頁）。博達学院とは、すなわち「倍達（中国東北部と朝鮮半島を含む朝鮮民族の本来の疆域）の学校」という意味であったのである。

三．申圭植の著作にあらわれた檀君思想

申圭植が展開した朝鮮民族独立運動は、大倣教の信仰に支えられた

ものであった。それは、彼が残した『児目涙』という詩集に掲載された詩の内容からも確認できる。²⁷⁾この詩集は、申圭植誕生六〇周年を記念して編集されたものであり、別名で「睨観詩集」とも称された。そこには、一九〇九年から一九二二年までの間に申圭植が創作した一六〇首余りの律詩と散文詩が収録されている。「児目涙」という題名は直訳すると「幼い子どもの目に浮かぶ涙」という意味であるが、「児目」は彼の号である睨観の「睨」の字をばらしたものであるので、申圭植が涙で詠んだ詩と解することができるだろう。この詩集には、羅喆・曹成煥・趙琬九・朴殷植・申采浩・趙素昂・安昌浩・申伯雨・洪命喜・盧伯麟などの朝鮮人独立運動家や、孫文・黄克強・宋教仁・孟頫など中国の革命運動家に関する詩が多数収録されている。

また、この詩集には大倣教に関する詩が数多く掲載されている。その中に「倣門題感」と題された詩がある。この詩には、申圭植の大倣教に対する考えがよく表現されている。その全文を引用すると、次の通りである。

四千三百載、重闢大倣門、萬象皆歸化、三神獨至尊、仁棣皆兄弟、靈檀有子孫、普救蒼生苦、先招倍達魂／又、粵昔鴻荒世、神人降自天、五戒宗綱在、三神至理傳、上元初三日、東方半萬年、遺民能報本、朝旭復光鮮／又、在天惟上帝、降世是人宗、生仙儒佛耶、無端倪初終、三眞歸一理、萬有被神功、又是邦家祖、誰非血族同／又、緬惟皇祖首開天、繼降神兄豈偶然、人皆相賀重生日、我亦難忘不死年／又、金花玉殿靈明現、暮鼓晨鐘大道傳、萬姓一家何處是、宗門咫尺放光鮮²⁸⁾

この中で「緬惟皇祖首開天、繼降神兄豈偶然、人皆相賀重生日、我

亦難忘不死年」という句に、羅喆が大倣教を重光した年（一九〇九年）に、申圭植が自死を諦めて再生の希望を見出したことがよく詠われている。

その他にも、開天日に天宮に参拝した時に詠んだ「拜退天宮」（「開天慶日拜天宮、一炷心香告血衷、此去如非神化力、頑冥何以奏微功」二二頁）や、南京にいる大倣教徒を訪問した際に詠んだ「寄南京同志（壬子秋）」（「早朝夜之半、默禱拜天宮、大道無私曲、至誠能感通……」三〇頁）がある。また、朴殷植（号は謙谷）と一緒に朝食をとった際に詠んだ「廬中即景」という題名の詩がある。この詩には、申圭植が居住していた室内の様子が詳しく描かれていて興味深い。その内容は次の通りである。

同謙老滄宗朝餐、瓶有梅落於水碗、余吹飲、忽得「瓶梅落水聽浮動」七字、看階前盆柏寒後依然本色、感構一對仍題室內、即景補成四律一首／天真在上晨昏拜、祖績懸中外內描、（樓上奉案檀祖神像、堂中掛置廣開土王碑字中軸、及忠武公遺之對聯）、瓶梅落水聽浮動、盆柏經霜見後凋、隨陽三影含蘆集、震嶽一聲獅虎吼、（於有正書局、得三雁圖、及見贈虎嘯圖、並掛壁）、寤寐起居歌哭裡、東窗紅日似前朝（五二頁）

また『児目涙』には、羅喆の死を悼んだ詩が多数収録されている。羅喆は一九一六年に黃海道九月山で自死したが、その時に申圭植が詠んだ「追悼文」や、開天節などの慶節日や大倣教関連の様々な場所での羅喆への思慕を詠った詩が掲載されている。それらを列挙すると、以下の通りである。

「留盛京奉天有感題寄弘巖（弘巖乃大倭教教主）」（「靈檀雨露白山春、一視莫非生育民、此地命名誠不偶、當年紀念奉天神」二二頁）

「贈弘巖先生」（「去年今日共圍圍、歌詠阿斯氣尚豪、隻雁南飛何處向、白山黑水路迢迢」二八頁）

「開天紀元節追慕」（「于于蠢蠢衆生悲、被澤叨光自不知、誰見東西古今史、神師君父總兼之」五二頁）

「奉悼羅公弘巖神兄五章（丙辰）」（「百玉其心黑鐵肝、怒然憂國十分殫、義聲興問淪盟罪、劍事歸誅締約奸、入獄那堪衆生苦、現身替受重刑安、妖氛晦塞塵囂上、不出斯人世道難／其二、天來喜報復甦還、嶽降先生試大艱、靈性工夫通帝側、妙香願使救人間、了來庶衆歸神市、祖述三桓降震檀、斬棘披荆尋舊蹟、翩翩道杖白頭山／其三、河行北陸復南韓、鐸我全球將轍環、惡魔頻謀加十字、大雄何畏達三觀、人間萬事伊誰賴、天上靈音遽忽頒、泰嶽其崩梁木壞、不堪回首阿斯山／其四、憶昔十年披肝膽、聯床風雨訂金蘭、活恩一縷方圖報、殉命三條奈忍看、鶴壽高山常仰止、鸞膠八月莫追攀、斜陽天末蒼涼立、浩氣東來滿兩間／其五、盟讀遺書涕淚零、春風化雨動頑冥、孤衷每念斯遺族、大道無量彼衆生、仇者乃云除勁敵、吾徒何以答神明、重重疊疊悠悠感、倭國前途均莫名」五三～四頁）

「並附一首戊午嘉倍日憶弘師」（「光陰容易又中秋、諱日居然度兩週、更閱遺書天日暗、空懷道範嶽雲悠、神靈降鑒應垂憫、塵世譜緣誰與訓、予影天涯無限恨、心喪未了又丁憂」五四頁）

「弘巖先生追悼文」（「太祖降世四千三百七十三年、舊曆丙辰八月十五日嘉倍節、大倭教都司教弘巖羅先生、在故國黃海道九月山三神祠、（檀祖神位奉安之地）、爲民族、爲宗國、爲衆生、爲大道絕食禱天畢、頒殉命三條及諸遺書、乃即歸天、同人等聞耗哀痛、中外無不悲慕、其翌年丁巳三月十五日、上海僑民之同濟社員及大倭教徒與遊學生等、聯合團體、舉行

追悼典禮、謹爲文敢告于、先生在天之靈曰」五四頁）

「輓章」（「前朝五百年間無雙國士、大教四千載後第一宗師」五五頁）

「維」（「太祖降世四千三百七十三年秋八月望日壬子、我大倭教都司教羅結弘巖先生、殉教於九月山、越明年三月十五日、海上後學等、追慕英靈、爲文述哀、其詞曰／嗚呼邦國殄瘁兮、世道何其凌夷、湫矣教化頹廢兮、民氣徒以萎靡、帝遣天使謫降兮、大倭復活於茲、適值妖氛漲天兮、魔障牢不可破、排萬難歷千劫兮、吾教稍有端倪、師曰余誠未至兮、入山修道有年、聞蒼生之疾苦兮、三日齋沐禱天、檀村民病俱蘇兮、偕來咸拜天真／皇祖眷佑四方兮、神化遠被西隣、回首故國山川兮、眼前狐狸縱橫、哀我民族呼冤兮、日月慘憺無光、三聖祠堂親詣兮、爲民贖罪自戕、噩耗忽傳内外兮、仲秋節日罔極、比耶蘇之磔列兮、其情尤可惻怛、異域亡命餘生兮、聞其耗而痛切、大教中興未艾兮、吾師易簣何速、後死者之無依兮、望仙賀而莫及、大東民氣未灰兮、繼其志者不乏、在天之靈陰助兮、神邦賴以光復、白山若礪碧海如帶兮、靈魂千古不滅兮、來聆哀文兮、普天同聲一哭」五五～六頁）

これらの詩を通じて、申圭植が大倭教初代教主の羅結をいかに深く尊敬していたか窺い知ることができる。

申圭植の大倭教思想については、彼の著書である『韓国魂』を通じても確認できる²⁹⁾。『韓国魂』は、一九二二年の同済社創立時に講演した内容をまとめたものであり、一九一四年一月一八日の李忠武公の殉国日にあわせて脱稿したものである。その後、朝鮮人同胞の間で広く回し読みされ、一九二〇年一〇月に刊行された雑誌『震檀』に連載される形で公表された。本書は「民族主義と復仇の大義を明らかにする」（同書、序言）目的で書かれ、申圭植自身も血と涙で編んだと告白し、別名『痛言』とも呼ばれた。

『韓国魂』はこのように始まる。「心が死んでしまうことより大きな悲しみはない。亡国の原因は、この心が死んだためである。…我々の大韓は亡んでしまったとは言え、我々各自の心の中には依然として一つの大韓がある。その我々の心がすなわち大韓の魂である。…同胞たちよ、皆一緒に大韓の魂を宝のように見なして、消滅しないようにし、まず各自その魂を救い出し、死なないようにしよう」（『韓国魂』一五～一六頁）。

また本書では、朝鮮民族の始祖檀君と共に、日本の秀吉軍を撃退した李舜臣將軍を尊崇している点が注目される。これについて次のように記されている。

我が開国始祖檀君は、即ち我らの主宰である。我が救国元勲である李舜臣は、即ち我らの統制である。…我が民族は我らの祖宗を忘れてはならない。我が始祖〔檀君を指す〕が神として降臨し開国した月に李忠武公が国を救うために殉難し、我が始祖が御天した月に李忠武公が降誕した。我らは一〇月三日をもって民族の大記念節としなければならぬ。特に我が檀君を推仰することは、生民教化の初めであつたからであり…李忠武公を崇めるのは、忠孝と文武で鞠躬尽瘁した方が、四千年の間、ただ忠武公一人だけであつたからである（『韓国魂』五六～七頁）。

これに関して、閔弼鎬の『伝記』にも、「〔申圭植は〕朝起きると国祖檀君の聖像に向かつて敬礼と黙念を捧げ、同時に李忠武公の「誓海魚龍動、盟山草木知〔海に誓えば魚と龍を動かし、山と盟すれば草木がこれを知る〕」という詩句を吟じながら、自身を謹慎し督励したと記されている（『伝記』一一〇頁）。また、先に引用した『兎目涙』所

収の「廬中即景」という詩をみると、申圭植は自らの居所について「二階には檀祖の神像を奉り、居間には広開土王碑文と忠武公の遺文を対にした掛け軸を掛けていた（樓上奉案檀祖神像、堂中掛置廣開土王碑字中軸、及忠武公遺之對聯）」（『兎目涙』五二頁）と記されている。

さらに近年、申圭植の檀君思想を知る上で貴重な資料が発見されている。中国の上海で刊行された『震壇』という週刊雑誌である。本誌は、朝鮮人と中国人の運動家が共同で編集・刊行したものであり、本文は漢文で書かれている。中国で発見され、一九二〇年一〇月に発行された第一号から翌年四月に発行された第二号までの内容を確認することができる。「震壇」とは「東方檀君の国」を意味し、申圭植や朴殷植らが張季鸞・胡政之・葉楚傖・史量才などの中国人諸氏と共同で朝鮮の歴史と文化の研究を行い、その成果を本誌に掲載している。本紙を通じて、上海の朝鮮人運動家と中国の革命運動家との交流関係や、当時の朝鮮人独立運動家たちが信奉していた民族思想について知ることができる。

本誌の内容は、帝国日本を中国と朝鮮の共通の敵として、日本帝国主義による蛮行を世界中に知らしめることを目的にしている。とりわけ注目したいのは、創刊号（一九二〇年一〇月一〇日発行）の冒頭（第二面）に、「共和萬歳」という見出しの創刊辞とともに、「震壇發行之祝、天下為公」と書かれた孫文の題字が紙面中央に大きく掲載されている点である。また、第四面の真中に大々的に、「震壇誕生之元旦、中華民國雙十節、新亞同濟社合祝、大韓民國二年十月十日」と記され、第五面の真中には「震壇報社萬歳、同舟共濟、大同黨敬祝」と記されている。このことから、本紙が同済社や新亞同済社の支援のもとにその機関紙的な役割をした雑誌であつたことが確認できる。また、中華民国学生聯合会総会の名義で「震壇出版誌慶、光華復旦」（第六

面」と謳われていることから、中国側からも賛同と援助がなされたことがわかる。第七面では「祝詞」が掲載されている。それらを見ると、例えば、中華工業協会からは「祝震壇報出版」と題して、「嗟我華韓、同種同文、爰處東亞、惟善是親、降及今世、迺辱強鄰、率彼醜虜、蠶食鯨吞、嗟我華韓、何以國存、困獸猶鬥、屈蟠求伸、立國之道、貴能合羣、而我華韓、關係齒唇、併力禦侮、責在吾民、臥薪嘗膽、雪恥維新、大哉震壇」と訴え、また吳敏於は「震壇報頌辭」と題して「粵稽中韓、相與唇齒、唐虞以降、歷數千祀、何物強隣、三島崛起、輾轉侵陵、東邦傾圯、爾辱我辱、爾恥我恥、嘗膽臥薪、未容或已、偉哉震壇、檀箕肖子、正義發揮、風行一紙、立儒廉頑、光復從此、宣武亞東、拭目以竣」と訴えている。

また、本紙では朝鮮の独立運動家と中国の革命運動家が行った抗日運動の成果を詳しく記しているのが大きな特徴となっている。創刊号では、「韓國獨立運動近史」の欄（第八面）で「國內外韓人之獨立宣言、國內韓人獨立宣言」という見出しで、三・一運動時に宣布された独立宣言書の内容を漢文で紹介しているが、そこでは「朝鮮建國四千二百五十二年」という「檀紀（檀君紀元）」を使用しているのが注目される。また「韓國消息」の欄（第九面）では、「獨立運動的統計」「元山韓人之示威運動」「韓義勇團首領被捕」について報告し、「中國消息」の欄（第一〇面）では「中東路之新合同」、「世界消息」の欄（第一〇面）では「美國排日問題」などについて詳述している。また、「痛言」の欄（第一一面）では、真ん中に「震壇叢報、東亞之光」と大書した陳独秀の祝辞と共に、「韓國魂」（仙盧主人撰（申圭植を指す））が掲載されている。ちなみに言うところ、この欄に連載された寄稿文を一つにまとめる形で、申圭植の『韓國魂』が出版された（そのために『韓國魂』のことを『痛言』とも称した）。また、「短評」の欄（二〇面）

では、「是我們的事」として「中國與朝鮮、如兄如弟、如足如手、朝鮮的痛苦、就是中國的痛苦、中國的痛苦、也就是朝鮮的痛苦、中國人幫助朝鮮運動獨立、不幫助、在是自己救自己、朝鮮要與中國連絡一致、也是自然的趨勢」と記されている。

創刊号の翌週に発行された第二号（一九二〇年一〇月一七日）にも注目すべき紙面がある。第七面の真ん中に「祝震壇發達、同舟共濟、蔣中正」と自筆で書かれた蔣介石の祝辞が大々的に掲載されているのである。この祝文からは蔣介石が新亞同濟社の活動に賛同していたことが窺える。孫文が亡くなった後、中国国民党の指導者となった蔣介石も、孫文と同様に臨政を擁護する立場をとり、臨政の要人たちに様々な支援を行った。その理由も、申圭植が中国の革命運動家たちとの間に築いた中韓連帯の輪の中に、蔣介石も入っていたからであると考えられる。

そして、第六号（一九二〇年十一月一四日発行）は特に注目すべき号となっている。この時は開天節（檀君の降誕と古朝鮮の建国が行われた陰曆一〇月三日を祝う日）が行われた週であり、檀君に関する特輯号としての内容構成となっている。第二面には、「韓國國慶開天節頌辭」と「韓國國慶開天節略史」が掲載されたほか、「社論」の欄で「吾族之進行方法」（白巖（朴殷植））が掲載された。そして、非常に大きな「大韓開國始祖檀君聖像」（第二面）と「太白山天池」の写真（第三面）が大々的に掲載されている。さらに第五面の「韓軍戰報」の欄では、「韓軍大破日兵於和龍」の題名で青山里戦闘の勝利を伝え、「韓國消息」の欄では「韓人國慶紀念」と題して「舊曆十月三日、即韓國始祖檀君降世及建國紀念の開天節、韓政府及留滬韓民團、當日下午二時、假靜安寺路夏令配克影戲館舉行慶祝云」と伝えている。

続く第七号（一九二〇年十一月二日）でも、前号に続いて開天節開

連の記事が大半を占めている。特に第二面では「韓國始祖檀君略史」という一文を掲載して、檀君の存在について詳しく説明した後、附録として「大倣教之由來」と「弘巖羅氏小史」という記事を掲載している。前者の記事では、扶餘の代天、高句麗の敬天、新羅の崇天、百済の拌天、高麗の壬侯、渤海の真倣、金の開天、滿洲の主神について述べ、これらは皆「大祖神之義」であると解説し、後者の記事では、羅喆の略歴と大倣教を重光した経緯などについて述べられている。

また、この号が発行された月は、露領地域における独立運動家の代表である李東輝が、ちょうどウラジオストクから上海に到着した時でもあり、第二面には李東輝の「開天節祝詞」が掲載されている。そこには、「大韓民國二年陰十月三日、國務總理李東輝、謹同兄弟姉妹、恭賀大祖神、開天慶日：迄於人類滅盡之時、歌咏倍達（檀君時國號祖光之義）靈光於和風甘露、永矢無窮」として、漢訳された「開天節祝詞」が掲載されている。注目すべきは、その漢訳詞の上に、漢字が一切使用されていない純ハンゲルの祝詞も同時に掲載されている点である。その内容は次の通りである。

大韓民國二年（一九二〇年）陰一〇月三日、國務總理李東輝は謹んで兄弟姉妹と共に、ハンベ様の開天なさった慶祝日を喜ぶのであり、私たちの生命と土地と力を初めて開いて下さったことを喜び讃え、また聖なる栄光と限りない陰徳を篤く思慕して讃え、この日を祝うことが正しいことであることを悟るのである。真つ暗な民族に激しい雨雪が降り注ぐ中で、ハンベ様の命綱をつかみながら、与えてくださった御陰を命にかえて人類が無くなる時まで、倍達（ペダル）の明るい光を温かい風と嬉しい露の中で培い歌うのである。³²⁾

ここでは「ハンベ様」という用語が使用されているのが注目される。「ハンベ」「한배」は大倣教用語で「한배召（ハンベコム）」の略語である。大倣教では、「한（ハン）」は「大」、「배（ベ）」は「祖」、「召（コム）」は「神」を意味する朝鮮の古語であるとされた。すなわち「한배召（ハンベコム）」とは、漢字で「大祖神」を意味する。一九〇九年二月に大倣教（当時は檀君教）が創設された当初、檀君に「大皇祖」という称号をつけて「檀君大皇祖」と称していた。しかし、一九一〇年の韓国併合後、このような称号は天皇に対する不敬に当たるとして使用が困難となった。そのために朝鮮語の古語に戻すという形で、「한배召（ハンベコム）」という名称が新たに採用され、これを略称する時「ハンベ（한배）」と称した。³³⁾つまり「ハンベ様」とは「檀君」のことを指すのである。李東輝は大倣教の信者ではなかったが、この祝辞から、大倣教の檀君思想が海外に亡命した朝鮮独立運動家の間でかなり普及していたことが読みとれる。

また、第三面には、紙面の真ん中に「八年前今日（陰十月三日韓國慶節）同濟社同人在上海密室内行紀念典禮圖」と題した大きな写真が掲載されている。本紙の刊行時から八年前というと、一九一二年のことである。すなわちこの写真は、一九一二年の陰曆一〇月三日に、同濟社の社人たちが上海の密室で開天節の典礼を秘密裡に行っていた時に撮影した写真である。特にこの写真を見てみると、密室の一方（写真の右側）に「開天上月初三日、在天惟上帝」、他方（写真の左側）には「降世是人宗、建國東方半万年」という額が掛けられている。その雰囲気から、大倣教の儀礼を厳肅に執り行っていることが一見して明らかである。

そして、第四面の「韓國消息」の欄では、「韓人國慶紀念盛況」という見出しで「舊曆十月三日、乃韓國始祖檀君、後世及建極之日、韓

人稱之開天節、且檀君以神人降世、神道設教、韓人信仰、認爲上帝、故世世相沿、爲國慶紀念日」と説明しながら、臨政の要人たちが開天節の記念行事を執り行った様子を詳しく伝えている。そして、次の第五面には「韓國國慶日（開天節）韓政府及民團舉行慶祝典禮圖（大韓民國二年陰十月三日）」と題した写真を大々的に掲載している。さらに、第四面から第五面にかけて「留滬大宗教人國慶紀念」という見出しで、上海在住の大宗教徒たちが大宗教の祭礼儀式を挙行したことが報じられている。また、第四面には「六年前今日（陰十月三日韓國慶節）同濟社、培達學會同人在上海、寰球學生會行慶祝典禮圖」という写真が掲載されている。この写真からも、同濟社とその傘下団体であった博達学院（この記事では「培達學會」と記載されている）が大宗教と深い関係にあったことが確認できる。

四・大韓民国臨時政府の創設と大宗教

一九一九年の三・一運動後、民族独立運動の高揚によって世界各地で組織された亡命政府が一つに統合され、一九一九年四月上海に大韓民国臨時政府が樹立された⁽³⁴⁾。上海の地に臨政が設立されたのも、申圭植が中国の革命運動家との連携の上に築いた朝鮮独立運動の基盤があったからであった⁽³⁵⁾。臨政が創設された当初、申圭植は健康状態が悪く、組閣の中には入らなかった。しかし、同年九月に李承晩が臨時大統領に就任して臨政が正式に運営を開始すると、申圭植は法務部総長に就任した。

臨政創設期において、申圭植は李承晩政権を支える重要な働きをした。その理由の一つとして、李承晩が大宗教の理念に賛同し、親近感を抱いていたことがあげられる。これに関して、一九一〇年代に大

教の朝鮮国内支部である南道本司を主管した姜虞は、李承晩が一九一八年に姜虞の告由式を通じて大宗教に入信したと述べている⁽³⁶⁾。李承晩はメソジスト派（韓国では監理教という）の洗礼を受けたプロテスタント信者であり、臨政が創設される以前は米国で亡命生活を送っていたので、姜虞の証言は信憑性が疑われるものである。しかし、これに関しては、大宗教という宗教教団の特殊性に留意する必要がある。大宗教は抗日独立運動の貫徹を目的とする非常に政治色の強い団体であった。実際、大宗教では他の宗教を信じる人々が自分の宗教を信仰したままで、大宗教に入信できるようにした⁽³⁷⁾。

李承晩は、メソジスト派宣教師のアッペンゼラーが建てた培材学堂に一九九四年に入学して近代学問を学び、一九九七年に貞洞教会で洗礼を受けてキリスト教徒となり、独立協会で万民共同会運動に関わった。参考までに言うと、李承晩と同じく、培材学堂で学び独立協会運動に参加した周時経は、『独立新聞』国文版の編集に従事して朝鮮語の近代化に貢献した人物であるが、貞洞教会でキリスト教の洗礼を受けていたにも拘わらず、一九〇九年に大宗教に入信している⁽³⁸⁾。臨政と大宗教との関連で言うと、臨時議政院の初代議長として臨政の産婆役をつとめ、その後、臨政の國務総理や大統領をつとめた李東寧（一八六九―一九四〇、号は石吾）もキリスト教の信者であったが、大宗教に入信した。彼も独立協会に加入して万民共同会運動に参加したが、一八九七年頃にキリスト教の信者となり、愛国啓蒙運動期には全德基牧師が活動していた尚洞教会で独立運動に従事した。その後、中国に亡命し、一九一三年頃に大宗教に入信して抗日独立運動に従事した⁽³⁹⁾。その他にも臨政創設時のメンバーとして、朴殷植・李始榮・曹成煥・趙琬九などが大宗教徒として活動していた⁽⁴⁰⁾。これと関連して、臨政時代の李承晩文書を検討してみると、一つ注目すべき事実が見出される。

李承晩が大倭教の信徒に個人的な私信を送る際に、「仁兄（台鑒）」という大倭教内部で使われていた用語を使用している点である。⁽⁴¹⁾ 海外に亡命した朝鮮人運動家にとって、大倭教は朝鮮人としての民族意識を自覚・覚醒させてくれる役割を果たしていた。李承晩は大倭教に改宗した訳ではなかったが、大倭教が掲げた抗日独立運動の精神に共鳴して賛同したものと推測される。⁽⁴²⁾

また朴賛翊の伝記によると、李承晩は一九二一年初め頃に上海の申園公園で大倭教徒の申圭植・朴賛翊と義兄弟を結んだとされている。⁽⁴³⁾ ここで朴賛翊（一八八四～一九四九…号は南坡）の経歴について簡単に説明しておこう。⁽⁴⁴⁾ 朴賛翊は、先に述べたように申圭植と義兄弟の契りを結び、申圭植の片腕として彼の外交活動を支援した大倭教徒であった。朴賛翊は旧韓末の愛国啓蒙運動に関与し、一九〇八年九月に組織された工業研究会の会長に就任した。同会の月報誌として『工業界』が刊行された際、同会の賛成員であった申圭植がその編輯部長をつとめた。それ以来、朴賛翊は申圭植を師と仰ぎ、彼から思想的な影響を大きく受けた。また、朴賛翊は一九一〇年頃に大倭教に入信し、それ以降、同じく大倭教徒であった申圭植の右腕として、彼の教団活動及び独立運動を支える活動を行った。朴賛翊は、間島で中国士官学校を卒業し中国語に堪能で、張作霖や張作相との交渉にあたるなど、東北軍閥との外交活動で活躍した。これに関して、朴賛翊は、「中国人よりもより流暢に中国語を話し：日本人の監視が厳しい地域でも中国服を着て、街を闊歩するには何の負担も感じなかった」とされる。⁽⁴⁵⁾ 朴賛翊は、申圭植と共に李承晩政権を支えた中心人物であり、また申圭植と孫文との会談が行われた際、申圭植を輔佐する副使をつとめるなど臨政内で重要な役割を果たした。

このように李承晩と深い信頼関係を有した申圭植は、李承晩の立場

や方針に忠実に従い、李承晩大統領を支える中心人物となった。しかし、臨政は世界各地で組織された亡命政府の寄せ集めの組織であったために、独立運動家の政治的信条や出身地域などによって草創期から分裂の様相を呈していた。そして、一九二一年二月には李承晩の退陣と臨政の将来について話し合う国民代表会議の招集が提起されるに至った。これに対して、国民代表会議の招集を支持する上海の改造派（政府組織を改編して維持することを主張）と北京の創造派（臨政を解体して新しい組織を創造することを主張）、およびこれを反対・阻止しようとする政府擁護派が激しく対立した。政府維持派は主に李承晩を中核とした畿湖派の人物たちであったが、申圭植もこの立場をとっていた。

またちょうどこの頃、一九二一年一月二日から一九二二年二月六日まで、米国のワシントンで国際会議が開催された。第一次大戦の間隙について勢力を膨張させた日本を牽制するために、米国が軍縮と太平洋極東問題を協議する会議を開催したのである。この会議には、太平洋と東アジアに権益がある日・英・米・仏・伊・中国・オランダ・ベルギー・ポルトガルの計九ヶ国が参加した。これに対して、臨政の李承晩大統領は、朝鮮の独立を列強に訴える絶好の機会と捉え、直接米国へ渡って交渉に臨むことを試みた。

李承晩大統領は、一九二一年五月一七日と一八日に臨政の議政院と國務院に対して、外交上の緊急事態と財政の危機を理由に米国へ渡航する旨を通知し、法務総長の申圭植を國務総理代行に任命した。こうして一九二一年五月以降、李承晩が米国へ発った後の臨政を申圭植が全面的に担うことになった。このような状況下で、臨政は一九二一年一〇月に國務會議の議決を経て、申圭植を特使とし、朴賛翊を副使、閔弼鎬を随行員として、孫文の率いる広東軍政府（中国護法政府）に派遣することを決定した。ちょうどこの頃、孫文は一九二〇年に第二

次広東軍政府を樹立し、翌一九二二年四月に非常国会を開催して正式に中華民国政府であることを宣言し、大總統に就任していたのである。こうして臨政の代表者（法務総長兼國務總理代行）である申圭植と広東軍政府（中国護法政府）の孫文總統との間で会見が持たれることになった。次節では、この会談について詳細に検討してみることになろう。

五、大韓民国臨時政府と中国護法政府との相互承認問題について

孫文と申圭植との間で行われたとされる臨政と中国護法政府との相互承認については、基礎史料とされている閔弼鎬著『中韓外交史話』に関する問題点が先行研究で指摘されている。例えば森悦子は、孫・申会談日の矛盾、下関条約に対する双方の見解の違い、副使・朴賛翊に関する記述がない点などを根拠に、『中韓外交史話』の信憑性について疑義を呈し、広東軍政府の非常国会で朝鮮独立案が議論されたことは確かだが、その際、韓国臨時政府承認案が提議されなかったなどの理由から、両政府の相互承認は行われなかったと論じている。その理由として、閔弼鎬自身が孫・申両氏の正式接見をもって中国護法政府が韓国臨時政府を正式承認すると早計してしまった点、申圭植の広東訪問から十数年たった後に記憶を辿って記された回顧録である点、一九三九年における抗日戦争への対応などの政治的思惑が介入している点などをあげている。⁽⁴⁶⁾

一方、韓国の歴史学界でも、臨政と護法政府との相互承認問題に関して、閔弼鎬資料の問題点が指摘されている。⁽⁴⁷⁾ その際、最大の問題とされているのが孫・申会談日の日付である。『中韓外交史話』では、

孫文と申圭植が会談を行ったのは一月三日であるとしている。しかし、孫文は一〇月一五日に広西に視察に出かけており、この時、会談の舞台である広州にはいなかった。森は中国側の資料を検討した結果、申圭植一行は一〇月一〇日頃に広東に到着し、それから一〇月一四日までの間に孫文と会談をもったと推測している。⁽⁴⁸⁾ これに対して、韓国の研究者の多くは、『孫中山年譜長編』の記事に依拠して、一〇月三日に孫・申会談が行われたと見なしている。⁽⁴⁹⁾ 例えば、当時の広州における韓・中運動家の動向を詳細に検証した韓詩俊は、中国側の資料を照合させながら、孫・申会談は一〇月三日と一〇月八日の二回にわたって行われ、さらに『中韓外交史話』で一〇月一八日に行われたと記されている北伐誓師典礼式についても、実際は一〇月一〇日に行われたと推定した。以下では、中国側資料によって『中韓外交史話』の日付等を修正した韓詩俊の研究を参照しながら、孫・申会談の概要について整理してみたい。

一九二一年九月、申圭植は特使として護法政府を訪問するために、朴賛翊を副使、閔弼鎬を随行員とする一〇数名と共に、護法政府に伝える国書を持って上海を出発した。申圭植は香港を経由して唐繼堯と会った後、広州へ向かった。広州に到着したのは九月二十九日頃であったと考えられる。広州に到着した申圭植は、非常総統府を訪れ、大本営総参議の胡漢民をはじめ、徐謙（大理院院長）、呂志伊（内務部次長）、伍廷芳（外交部長）、伍朝樞（外交部次長）、謝持（總統府秘書長）、廖仲愷（財政部長）、林森（参議院院長）、郭泰祺（總統府宣伝局長）、程潜（軍政部次長）といった護法政府の主要人士と面会した。これに続き、申圭植は孫文總統を訪問して会談を行った。当時、總統の官邸は觀音山にあった。申圭植は一〇月三日に胡漢民の案内で孫文を訪問し、二時間にわたる会談を行い、この席で孫文に対し、臨時政府の承

認を求める五項目からなる要請書を提出した。⁽⁵⁰⁾

第一条、大韓民国臨時政府は護法政府を大中華民國正統政府として承認する。

第二条、大中華民國護法政府が大韓民国臨時政府を承認することを要請する。

第三条、韓国学生の中華民國軍官学校への収容を許可することを要請する。

第四条、借款五百萬元を要請する。

第五条、租借地帯を許可し、韓国独立軍の養成を支援することを要請する。⁽⁵¹⁾

これに対して孫文は、第四条と第五条に関しては北伐が成功してからの話であるとして断つたものの、第一条から第三条に対しては承認したとされる。その際、臨政代表者が広東に常駐して、両政府の緊密な連絡を図っていくことが決められた。こうして、申圭植の補佐役として臨政の外務部外事局長をつとめていた朴賛翊が臨政代表に任命され、広東に常駐しながら護法政府との連絡・外交業務を行うことになった。⁽⁵²⁾

その後、申圭植は孫文にもう一度会った。一〇月八日は孫文が提出した北伐案について非常国会が緊急会議を開き通過させた日で、この日に孫文は申圭植を臨政の特使として正式に接見した。『民国大事日誌』の一九二一年一〇月八日号に、「孫大總統領が正式に接見、韓国臨時政府特使申圭植」と記録されている。⁽⁵³⁾その後、申圭植は一〇月一〇日に東較場で開催された辛亥革命一〇周年記念式典に出席した。⁽⁵⁴⁾

以上が孫・申会談の概要である。なお、この会談で問題となってい

るのは、両政府の相互承認が正式に成立したかどうかである。これに関しては、現在までのところ、閔弼鎬が孫・申会談の内容を過大評価したというのが通説となっている。孫文との会談を終えた後、申圭植は帰途の車中で閔弼鎬に向かって、「此次蒙孫大總統正式接見、雖屬一種儀式、然其中意義、至爲重大、自臨時政府成立以來、此可謂最值得紀念一大事」と述べた。これに対して、閔弼鎬は「公言極是、此次中國護法政府正式承認我國臨時政府、足證孫大總統目光遠大、正義感強烈、實令人敬佩、至於非常國會對於餘等之熱烈同情、尤不易得」と答えている（傍線は筆者による）。⁽⁵⁵⁾つまり、申圭植が「一種の儀式」であつたと捉えたのに対して、閔弼鎬は会談が持たれたこと自体で「正式承認」と誤解してしまったのである。また、閔弼鎬は、会談で提示した五箇条について、孫文が「關於第二條承認韓國臨時政府一節、原則上毫無問題、對於流亡中國而繼續艱苦奮闘之貴臨時政府、我護法政府自應豫以深切同情、而加以承認、實則我護法政府迄今亦尚未得他國之承認也」と述べたと記している。さらに、その後行われた辛亥革命一〇周年記念式典に関して、「孫大總統擬於本月十八日上午九時、在東較場舉行北伐誓師典禮、同時正式接見閣下、務祈屆時賀臨、又承認韓國臨時政府一事、參衆兩院議員大多熱烈贊同、開國會時、通過一節、絕無問題」と記している。ここでは韓国臨時政府の承認が非常国会で通過したとしているが、実際には「臨政の正式承認」が行われたわけではなく、「朝鮮の独立」が承認されたのであつた。⁽⁵⁶⁾すなわち、会談の中で孫文が申圭植の提案に賛同したのは事実であつたと考えられるが、ただし両政府間の相互承認までには至っていなかったのである。これに対して韓国の歴史学界では、「相互承認の問題は形式上、両国家の議会承認手続きを経なければならぬが、双方ともこれを怠つたという限界はある。しかし、実際は相互承認を達成したと言っ

でも過言ではない」⁽⁵⁹⁾、「相互承認問題は、国際法上から見れば、その手続きや形式に問題がある。しかし、臨時政府としては、護法政府から『事実上の承認』を獲得した大きな外交的成果であったことは疑いようがない」というように、「事実上」の承認であったと解釈するのが一般的となっている。

両政府間の相互承認問題はさておいて、申圭植の広東訪問によって、臨政と護法政府との紐帯がいつそう深まったことは事実である。臨政は上海に本部を置いて活動しながらも、中国各地に活動基盤を設けていった。その方法の一つが、中国の主要都市に韓中両国の人士が参与する中韓互助会を結成することであった。臨政の特使派遣に先だつて広州で朝鮮と中国の人士たちが、一九二一年九月に中韓協会を組織したのである。中国側の人士は大部分、非常国会の議員たちであり、朝鮮側には金檀庭と李愚氓ら臨政の宣伝員が含まれていた。⁽⁶¹⁾これと連動する形で、申圭植は孫文に五箇条の要請の他に別の要求をした。一九二一年一月に開催予定のワシントン会議に対して、中韓共同で対応することを求めたのだ⁽⁶²⁾。先に述べたように、臨政はワシントン会議に李承晩臨時大統領を派遣する計画だったが、この会議には中国も正式な参加国として招聘されており、日本による被圧迫国という同じ立場から、中国の代表者に朝鮮の独立問題を訴えてもらおうと考えたのである。これに対し、孫文はワシントン会議が持つ限界を指摘しつつも、護法政府代表に訓令を下し、臨時政府の代表と協力するように命じたとされる。⁽⁶³⁾

これに関して、申圭植は孫文との会談の前に、中国の新聞紙上で中国に朝鮮独立案をワシントン会議に提出することを求める通告を発表している。⁽⁶⁴⁾さらに、日本側の記録によると、一〇月二二日に「中韓協会員（支那側葉夏聲外五名、韓人側申圭植以下八名）は広州市議員招待所

にて秘密会議を開き朝鮮独立に関して今後採るべき手段方法及対日政策に付数時間討議し：朝鮮人は独立準備に必要な物質的資力に乏しきを以て相当基礎の固まる迄支那会員より費用の補助を受けること」などが決議されたと報告されている。⁽⁶⁵⁾また、『民国日報』一九二一年二月五日付に「国会中朝鮮独立提案」と題した記事が掲載され、非常国会で朝鮮独立案が公開されたことが報じられた。そこでは「太平洋会議（ワシントン会議を指す）はすでに開幕したが、このチャンスに乗じて、この案（朝鮮独立案）を大会が議決し、韓国はもとより独立国であり、日本に不法に侵害されたことを全国に電報を打って知らせ、並びにただちに太平洋会議に電報で通達して我が国の外交隠忍の恥を雪いではどうであろうか。：血統がつながっている我が国が一言も言わずに黙っておれようか」と訴えた。⁽⁶⁶⁾

また、両政府間の正式な相互承認には至らなかったものの、孫文自身、申圭植の要請をある程度受け入れたことは事実であった。例えば、上記の約款の第三条に記されているように、朝鮮の青年たちが中国の軍官学校へ実際に入学していった。申圭植は自身が武官学校出身の軍人であったこともあり、軍事教育を重視し、朝鮮人青年を中国の軍事学校へ送ることを重視した。一例をあげると、一九二一年に孫・申会談が行われた前のことになるが、申圭植は孫文を通じて雲南講武堂（軍官学校）に朝鮮人学生を入学させるように、雲南省督軍であった唐繼堯に依頼した。朝鮮人の置かれた立場に同情した唐繼堯は、一九一六年秋に四人の朝鮮人青年を雲南講武堂へ入学させた。その中の一人に李範奭がいた。⁽⁶⁷⁾李範奭は騎兵科に入って一九一九年に同課程を修了した。その後、申圭植と孫文の間で書信を運ぶ伝達係を担当した。⁽⁶⁸⁾このような前例に鑑みて、申圭植は臨政代表者の立場から中国護法政府の代表である孫文に、朝鮮人学生为中国軍官学校への入学を正

式に許可するように依頼したものと思われる。これに関して、閔弼鎬の『伝記』によると、申圭植は保定軍官学校・天津軍需学校・南京海軍学校・呉淞商船学校・湖北講武堂・雲南軍官学校（雲南講武堂）・杭州体育学校などの軍事学校に朝鮮人学生を入学させ、約一〇年間に一〇〇名程度の卒業生を輩出したと述べている（『伝記』一三〇～一頁）。ちなみに、雲南講武堂で訓練を受けた李範奭は、一九四〇年に重慶で組織された光復軍の参謀長をつとめ、太平洋戦争末期における朝鮮独立軍の中心人物となった^⑧。申圭植の紹介によって中国の軍事学校に入学して専門的な軍事教育を受けた朝鮮人青年たちは、このように抗日戦争期の中国において朝鮮独立軍の中心的役割を果たす指導者として育っていったのである。

むすびにかえて…申圭植の死去と後孫による 抗日独立運動の展開

このような申圭植の努力にも拘わらず、臨政をめぐる状況は悪化していった。申圭植は孫文との会談を終えた後、同年（一九二二年）二月二五日に広東の地を離れ帰途に就いた。一方、一九二二年二月に終了したワシントン会議は、李承晩や臨政擁護派の期待に反し、何の成果も得られずに終了した。これまで国民代表会議の召集に反対し、すべての努力を外交活動に集中させてきた申圭植内閣の責任を問う結果をもたらした。そして第一〇回臨時議政院会議において、国民代表会議の開催が正式に決定され、李承晩大統領に対する不信任案決議が出された。これによって申圭植國務總理代行が辞任し、一九二二年三月以降、臨政は事実上、制御不能な状態に陥った。この状況を悲観した申圭植は、心臓病と神経衰弱で病床についてしまった。申圭植を失

望させたもう一つの要因は、陳炯明の惠州反乱であった。その年の六月に広東軍政府樹立の決定的な力となった広東軍閥の陳炯明が孫文に反旗を翻した。幸いなことに、孫文は危機を脱して上海へ移動した。

この知らせを聞いた申圭植は深い憂いに沈んだ。病状が悪化して病院に入院した申圭植は、自分の病が回復することが困難であると判断すると、「私は何の罪も無い。私は何の罪も無い。それじゃ、後をよろしく頼む。友人たちよ。：私はもう行く。皆よ、臨時政府をよく守り、三千万同胞のために尽力してくれ。私はもう行く。：私は何の罪も無い」と語り、それ以後、何も語らず、絶食し、薬餌もとらないという「不言・不薬・不食」の状態に入ってしまった。どんなに衰弱しても飲食を一切拒絶し、同志たちが肛門から注射で牛乳や卵などの栄養食を補給しようとしても頑固として拒否し、二五日のあいだ何も語らず目を閉じて横たわったまままで過ごした末、一九二二年九月二五日（陰暦八月五日）に「政府、政府（を守れ）」という言葉を残して、享年四五才の短い生涯を終えた（『伝記』一四三～四頁）。

申圭植の遺骸は、孫文・李始榮・李東寧など朝鮮や中国の革命志士一〇〇〇名が哀悼する中で、上海フランス租界虹橋万国公園（現在の上海虹橋路にある万国公墓宋慶齡陵）に埋葬された。『独立新聞』はその葬儀の様子を詳しく伝え、全三段にわたって「故晩親申圭植先生肖像」を掲載し、彼の略歴を紹介しながらその死を弔った^⑨。また、申圭植の死は朝鮮国内の新聞でも報道され、申圭植の死を「民族的大損失」であるとし、独立運動に対する貢献が讃えられた^⑩。大主教側は申圭植の臨終に際して「正教加大兄」に昇秩した（『六十年史』八二〇～二頁）。解放後、大韓民国政府は申圭植の功勲を称えるために、一九六二年に建国功勲章大統領章（勲二等）を死後叙勲した。一九九三年八月に中国上海にあった申圭植の遺骸を韓国へ移葬し、国立ソウル

顕忠院臨時政府要人墓域第八号に安置した。

朝鮮民族独立運動に及ぼした申圭植の影響を考える際に注目したいのは、申圭植の死後、彼の遺族と独立運動家の家族が婚姻を通じて姻戚関係となり、その後の民族独立運動で大きな役割を果たしていった点である。例えば、申圭植の末弟の申東植は臨政の聯通制で活動したが、一九三八年に彼の長男の申俊浩を申圭植の息子として養子に送り、申圭植の家系が絶えないようにした。また、博達学院で学び申圭植の弟子となった尹潜善（一八九七―一九九〇、号は海葦⁷⁶）の二番目の娘・尹完姫と申俊浩が一九四〇年に結婚して、尹潜善一家と申圭植一家は姻戚関係となった。解放後、尹潜善は一九六〇年の四・一九革命で李承晩が下野した後、大韓民国第四代大統領をつとめることになる。

とりわけ申圭植の遺志は、義弟（仁義の契りを交わした弟）である朴賛翊と実弟（血縁上の実弟）の申健植に引き継がれていた。申圭植の死後、朴賛翊は申圭植の人脈関係を引き継いで、臨政の対中外交を一手に引き受けた。彼は一九二九年頃から南京に首都を定めた国民政府と本格的な関係を持ち始めた。一九三〇年に彼は中国国民党に入党した。中国国民党の幹部であった陳果夫の紹介を受けて、彼は中国国民党国際部宣伝課で勤務するようになった⁷⁷。これにより、彼は臨政と中国国民党との連結点となった。当時、中国国民党と交渉を引き受けたのは、朴賛翊をはじめ、安恭根、嚴恒燮など三人であった。金九ら一行が日本の追跡をかわしながら江蘇省嘉興に潜伏したり、臨政が杭州に拠点を持つことができたのも、朴賛翊の中国外交によるものであった。一九三三年に朴賛翊は、金九と蔣介石の二人の巨頭の会談を成就させた。この会談を通じて、中国国民党は朝鮮の抗日青年を中国軍官学校で育成することに合意した。翌年には、河南省にある洛

陽軍官学校に韓人特別班を設置し、韓人青年たちを初級将校として育成する事業を始めた。一九三七年日中戦争勃発以後は、金九主席を輔佐しながら、臨政の幹部として中国との外交交渉を続けた。一九四〇年に臨政が重慶へ移転した際、彼が中国の国民政府と交渉した結果、一九四〇年九月一七日に臨政が国軍として韓国光復軍を創設するまでに至った。翌月に国務委員として臨政の法務部長となった朴賛翊は、中国国民党の幹部である朱家驊と交渉し、韓人青年たちを募集する徵募処組織活動費一〇万元の支援を受けた。一九四三年二月にも朴賛翊は趙素昂、金奎植と共に交渉代表をつとめ、一九四四年六月に金九と蔣介石の秘密会談を成就させた。その結果、五〇〇万元借款と毎月の活動費として百万元の支援を決定させた。重慶時代に彼は韓国独立党の中央執行委員となり、臨政では法務部長をつとめた。一九四三年九月に三番目の息子の朴英俊が臨政の財務部理財課長をつとめた。光復後、朴賛翊は一九四五年一〇月に駐華韓僑宣撫団を結成し、その団長として朝鮮人同胞たちの帰国を支援した⁷⁸。

一方、申圭植の実兄である申健植は、杭州省立の医薬専門学校で学び、一九二一年に卒業した。一九三七年の日中戦争に際して、南京陸軍医院で軍医を務めた。日中戦争の渦中で臨政が重慶へ移動すると、臨政の財務部次長を長年つとめた。朴賛翊と申健植は、互いの子供の婚姻を通じて姻戚関係となった。朴賛翊の息子の朴英俊は、申健植の一人娘の申順浩と結婚し、夫妻で独立運動に投身していった。彼らは、申圭植が信じた大倬教の信仰心によって固く結び付いていた。これに関して、朴英俊は回顧談の中で次のように述べている。

父をはじめあらゆる家族が満州に亡命した後、私が生まれた頃には、「大倬教」独立運動」という等式が成立していた時節であった。

：私は物心のつかない幼い時節から家族たちとともに国祖である檀君を祀る信仰活動をした。「弘益人間」という大宗教の根本理念を正確に理解できなかったが、我々の家族だけではなく大部分の独立運動家の家族が信じて従うのを見て、非常に良いものであるという考えを持つようになった。その後、満州を離れて中原で学校に通って、また光復軍にいながらも、日帝に対する抵抗意識と祖国独立の強い意志の後には常に大宗教の思想が私について回った。それは涸れることのない湧き水のように、外勢に対する闘争の源泉となった。馴染みのない外国の宗教よりも、我が民族の情緒と同族愛の根本となる我が民族の宗教であったからである。⁽⁶⁾

以上のような記録を通じて、申圭植が孫文をはじめとする中国革命家たちとの間で築いた連帯関係が、その後、蒋介石が率いる中国国民党と臨政との連携として継承されていたことがわかる。一九二〇年代後半以降、臨政は事実上、有名無実化していたが、一九三〇年代に入ってその活動をにわかに盛り返していったのも、中国国民党の支援によるものであった。その際、注目すべきなのは、臨政要員の多くが大宗教徒であり、彼らの信じた大宗教信仰が臨政を最後まで維持し続ける原動力の一つとなった点である。従来の先行研究では、臨政に及ぼした大宗教の影響に関して看過される傾向があった。大宗教は抗日独立運動を目的とする秘密結社の団体であり、大宗教徒間の連絡・交流は偽名や暗号が使用される場合が多く、その活動実態を把握することが非常に困難であるのが大きな理由である。しかしながら、臨政と中国国民党との連携は、朝鮮近代史と中国近代史の両分野にまたがる重要な研究課題である。今後、臨政と中国国民党を媒介・連結した大宗教徒に関して、中国側資料による検証を行いながら、より深層的

な研究が必要となるであろう。

注

- (1) 大宗教の教団史については、大宗教教経係史編修委員会編『大宗教重光六十年史』（大宗教総本司、一九七一年）を参照。本書を引用する際は『六十年史』と略記し、頁数のみを記す。
- (2) 羅詰による檀君教の創設と大宗教への教名改称については、佐々充昭『朝鮮近代における大宗教の創設・檀君教の復興と羅詰の生涯』（明石書店、二〇二一年）を参照。
- (3) 最近の研究として、신운용『申圭植의 民族運動과 大宗教』（『国学研究』二三、二〇一九年）、조남호『申圭植과 大宗教（一）』（『歴史文化研究』八四、二〇二二年）、조남호『申圭植과 大宗教（二）』（『大宗教関連詩翻訳』（『国学研究』二八、二〇二四年）、金東煥『大宗教抗日闘争人物事典』（선인、二〇二四年）の「申圭植」の項目（五二五～五三五頁）などがある。
- (4) 単行本として、石源華・金俊燁共編『申圭植・閔弼鎬와 韓中關係』（나남출판、二〇〇三年）、祝觀申圭植全集編纂委員会編纂兼発行『祝觀申圭植全集』（二〇一九年、장석홍『申圭植・民族革命의 先覺者、臨時政府의 주춧돌』（歴史空間、二〇二四年）、姜英心『申圭植・時代를 앞서간 民族革命의 先覺者』（歴史空間、二〇一〇年）、김삼웅『祝觀申圭植評伝』（선인、二〇二二年）、노관범編著『朴殷植・申圭植』（장비、二〇二四年）がある。その他、申圭植を扱った近年の学術研究の動向に関しては、李淑花『祝觀申圭植研究의 動向과 課題』（『歴史文化研究』八四、二〇二二年）を参照。
- (5) 佐々充昭『申圭植의 宗教思想과 民族獨立運動—디아스포라 空間에서 宗教性의 表出』（『国学研究所編『倍達民族의 歴史意識과 思想家들』한울리、二〇〇八年）、佐々充昭『亡命디아스포라による朝鮮ナショナル・アイデンティティの創出—大宗教が大韓民国臨時政府運動に及ぼした影響を中心に』（『朝鮮史研究会論文集』第四三集、二〇〇五年）。
- (6) ここでいう『中韓外交史話』は、中国語版『中國護法政府訪問記』（韓国語版『韓・中外交史話』）のことを指す。閔弼鎬の証言によると、臨政が重慶にある時、臨政の出資で申圭植の遺著を『中韓外交史話』と題して五千冊を印刷・配布したという。現在、韓国の国立国会図書館に所蔵されている、閔石麟編著『中韓外交史話』（韓國史地叢書第一種、東方出版公司刊行、一九四二年）がその原本であると考えられる。本書には、第一輯「中國護法政府承認韓國臨時政府始末實記」、第二輯「韓國魂」、第三輯「兒目涙」、第

四輯「申圭植先生傳略」と附録が収録されている。解放後、本書は台湾で、閔石麟編著『韓國魂暨兒目涙』（脱觀先生紀念會發行 臺北・三省印刷廠承印、一九五五年）として再版された。その際、第一輯「韓國魂」、第二輯「兒目涙」、第三輯「脱觀申圭植先生傳記」、第四輯「中國護法政府訪問記」という題名で各書が収録された。「中國護法政府訪問記」の構成は、第一章・南行、第二章・訪唐繼堯將軍、第三章・廣州一瞥、第四章・孫大總統會見記、第五章・呈遞國書、第六章・中山縣紀遊、第七章・中韓美法聯歡記、となっている。その後、本書の第四章と第五章の部分を掲載した、閔石麟「中國護法政府承認韓國臨時政府始末實紀」（『革命文獻』第七輯、臺北・中國國民黨史史料編纂委員會、一九五四年）や、第一章から第五章までを再録した閔叟撰「五十年前中韓兩國一頁外交史話、中山先生廣州接見申專使記」（『中華民國史事紀要』中華民國一〇年七至一二月份、中華民國研究中心、一九八二年、六六三～六七七頁）の他、各種の中國語版が出版されている。韓国でも翻訳本が多数出版されている。朝鮮戦争後の一九五五年に當時の大統領であった李承晩は、台湾で刊行された『韓國魂暨兒目涙』（脱觀先生紀念會、一九五五年）のうち、「韓國魂」を「韓國의 얼」、「中國護法政府訪問記」を「韓・中外交史話」、「脱觀申圭植先生傳記」をそのままの題名で韓國語に翻訳し、閔石麟編著『韓國의 얼』公報室發行として公刊した（この版では「兒目涙」は収録されていない）。本書は絶版となり入手困難となったが、その後、高靈申氏ソウル宗親会会長で普信閣の社長であった申大植の尽力よって、閔弼鎬編著『韓國魂』（서울・普信閣、一九七一年）として再版された。その後も韓国で複数の翻訳本が出版されている。中國語本と韓國語翻訳本の種類については、이금선「申圭植『韓國魂』의 版本 및 翻訳版本의 研究」（『洙上古典研究』四二、二〇一四年）に詳述されている。なお、閔弼鎬に関する伝記として、金俊燁編『石麟閔弼鎬伝』（한글서판、一九九五年）が韓国で出版されており、本書にも閔弼鎬の著作が収録されている。

(7) 狭間直樹「孫文と韓国独立運動」（『季刊青丘』四、一九九〇年）。管見によれば、日本で孫文・申圭植会談について論じた最初の論稿である。脚注や典拠が記されていないが、閔石麟、前掲「中國護法政府承認韓國臨時政府始末實紀」を要約したものと考えられる。短いエッセイであるが、孫・申会談の内容と閔弼鎬史料に関する問題点が簡潔にまとめられている。

(8) 森悦子「中国護法政府の大韓民国臨時政府正式承認問題について」（『史林』第七二卷四号、一九九三年七月、七〇頁）。

(9) 申圭植の生涯に関しては（注四）にあげた論著を参照した。なお、閔弼鎬

著『脱觀申圭植伝記』に関しては、異本が多数あるが、本稿では公報室版（一九五五年）を再版した『韓國魂』（普信閣、一九七一年）に収録されたものを参照した。本書を引用する際は「伝記」と略記し、頁数のみを記す。申伯雨は、新民会・大東青年団・西路軍政署・朝鮮労働総同盟などに参加した独立運動家である。申伯雨も大倭教に入信し、解放後は大倭教再建の中心人物として活躍した（畊夫申伯雨先生記念事業会編集発行『畊夫申伯雨』一九七三年を参照）。

(11) 閔弼鎬著『伝記』には、申圭植がいつ大倭教に入信したのか記されていない。一方、大倭教の教団史には、「開天四三六六年（西曆一九〇九年）己酉正月に大倭教が重光されると、首先奉教し篤信した」と記されている（『六十年史』八二頁）。このことから、申圭植が大倭教に入信したのは、一九〇九年二月（陰曆一月）頃であったと推定される。

(12) 大倭教では入信後に名前を漢字一字に変えて教名とするのが一般的である。例えば、初代教主の羅寅永は「羅喆」と改名し、第二代教主の金教猷は「金猷」に改名した。「申檀」を申圭植の中國名であると説明している資料もあるが、それは正確な説明ではない。

(13) 大倭教では、一九一七年御天節（陰曆三月一日）の際に開催された第一回教議會において「司教・正教・尚教・知教・參教」の五つの教職が定められた（『倭門秩序』第六條、『六十年史』三一九頁）。これらの教職名は教団内の階層的秩序として「教秩」と称された（『大倭教弘範』第四條、『六十年史』三〇七頁）。

(14) 金教猷編、尹世復訳、李榮載編修『弘巖神兄朝天記』（大倭教總本司、二〇〇二年、五〇頁）。

(15) 同右、一三九頁。

(16) 孫科志『上海韓人社会史：一九一〇～一九四五』（도서출판한울、二〇〇一年、一九〇頁）。

(17) 他の記録によると、一九一七年頃上海の西二道本司に所属した大倭教徒として以下の人物があげられている。閔濟鎬・閔弼鎬・申健植・申翼熙・朴殷植・李東寧・申錫雨・李鐸・金甲（玄圭煥『韓國流移民史』語文閣、一九六七年、五六九頁）。

(18) 同済社については、金喜坤「同済社와 上海地域 獨立運動의 胎動」（『中國閔内韓國獨立運動團體研究』知識産業社、一九九五年）を参照。

(19) この時に詠んだ申圭植の追悼文が、前掲『弘巖神兄朝天記』一四〇頁に掲載されている。

(20) 洪命熹「上海時代の 丹齋」（『丹齋申采浩全集』下、丹齋申采浩先生記念事

- 業会、螢雪出版社、一九八二年、四七四頁。
- (21) 陳果夫「陳英士先生革命事蹟」(秦孝儀主編『陳英士先生紀念集』臺北：中國國民黨中央委員會黨史委員會、一九七七年、一二八頁)。「新編韓國史」[日帝の武断統治와 三・一運動]Ⅱ「一九一〇年代民族運動의 展開」(韓國史 DATABASE に掲載)より引用。
- (22) 李明花「上海에서의 韓民族教育運動」(『韓國獨立運動史研究』四、一九九〇年、一〇九頁)。
- (23) 鄭元澤著、洪淳鉦編『志山外遊日誌』(探求堂、一九八三年、七〇～八九頁)。
- (24) 閔泳秀(一九二一～二〇一一)は中国上海で生まれた。一九四〇年九月に光復軍が創設されると中国中央陸軍軍官学校に入学し、一八期で卒業した。その後、総司令部に勤務し、一九四五年に光復軍第二支隊で総務班員として勤務した(「独立有功者公的情報」管理番号八四五三「閔泳秀」、功勳電子史料館 [https://e-gonghun.mpva.go.kr/user/index.do?sessionId=NuYCBScWldkVcWhicRXERjOfelf4_yD8IDWOKxrem520] 参照)。
- (25) 姜英心、前掲『申圭植：時代를 앞서간 民族革命의 先覺者』一七九頁より引用。
- (26) 倍達民族觀念に関しては、佐々充昭、前掲『朝鮮近代における大倭教の創設』三一〇～一頁を参照。
- (27) 『兎目涙』に関する研究として、진옥경「独立志士 申圭植 漢詩集『兎目涙』研究(一)——作品繫年과 解説을 中心으로」(『中国文学』一〇八、二〇二一年)、박청매・이승우「晚觀 申圭植의 油廬詩 考察」(『韓國漢文研究』九三、二〇二五年)がある。
- (28) 閔石麟編著『韓國魂暨兎目涙』(臺北：晚觀先生紀念會、一九五五年)に第二輯として収録された「兎目涙」(三五頁)を参照。以下、本書からの引用は頁数のみを記す。
- (29) 本稿では、閔弼鎬編著、前掲『韓國魂』(普信閣版、一三～五七頁)に収録されている(第一部)晚觀申圭植遺著『韓國魂』を参照した。本書からの引用は頁数のみを記す。
- (30) 正式名称は『震壇週報』であるが、『震壇』と略称される場合が多く、本稿でも『震壇』とした。前掲『晚觀申圭植全集』巻二に影印収録されている。なお、本誌の概要に関しては、劉霞・牛林杰「진단(震壇)을 통해 본 近代韓中交流의 斷面」(『韓國學研究』四六、二〇一七年八月)を参照。
- (31) 「震」は『周易』の卦で「東方」を意味し、中国東方の国である朝鮮を指した。渤海は国号を「震国」「震旦」「東方の朝日の昇る国」と称し、高麗も「震旦」「震域」という別称を使用した(『韓國民族文化大百科事典』参照)。近代以降、檀君ナショナリズムの高揚によって「震旦」は「震壇」と解釈され、「東方の檀君の国」という意味でこの用語が使用された。なお、「檀君」は「壇君」と表記する場合もあり、「震壇」とも称した。参考までに言うところ、植民地期朝鮮で一九三四年に「国学」朝鮮学の発展を目指して結成された「震壇学会」も、この用語を学会名に使用した。
- (32) 李東輝「개년질적사」『震壇』第七号、一九二〇年二月二日付、第二面(震壇報社：中国上海)。
- (33) 佐々充昭、前掲『朝鮮近代における大倭教の創設』三五三～四頁。
- (34) 臨政に関しては膨大な研究成果が蓄積されているが、本稿では、特に臨政の沿革と概要に関して、金喜坤『臨時政府時期의 大韓民國研究』(知識産業社、二〇一五年)と国史編纂委員會編『韓國史論』一〇(一九八一年一月)の「大韓民國臨時政府」の項目(韓國史 DATABASE に掲載)を参照した。
- (35) 金喜坤「大韓民國臨時政府와 申圭植」(石源華・金俊燁共編、前掲『申圭植・閔弼鎬와 韓中關係』五八頁)。
- (36) 姜虞「湖石先生文集」(『獨立運動史資料集』巻二、獨立運動史編纂委員會、一九七七年)の巻四「家狀」(五一七頁)。
- (37) 吳英燮「大韓民國臨時政府要人들 의 檀君認識」(『韓國民族運動史研究』四七、二〇〇六年、一八七頁)。
- (38) 佐々充昭「近代朝鮮語學の開拓者・周時經の宗教遍歴——大倭教との關係を中心に」(『立命館言語文化研究』第三五巻二号、二〇二四年)参照。
- (39) 金東煥、前掲『大倭教抗日闘争人物事典』「李東寧」の項目(六九八～六九九頁)を参照。尚洞教会で活動していた獨立運動家の中には、その後、大倭教に入信した者が多い。
- (40) 佐々充昭、前掲「亡命デイスボラによる朝鮮ナショナル・アイデンティティの創出——大倭教が大韓民國臨時政府運動に及ぼした影響を中心に」を参照。
- (41) 「朴殷植から李承晩への書簡」(一九二五年四月一日)、雲南李承晩文書編纂委員會編『雲南李承晩文書東文篇』巻一七(簡札二)、一九九八年、五九頁。その他、申圭植・李始榮・趙琬九らに送った書簡でも、大倭教徒間で呼び合う「仁兄」を使用している。
- (42) 一九四八年八月一日に大韓民國が樹立され、李承晩が初代大統領に就任した。李承晩は自らの政權基盤が脆弱だったこともあり、第一共和国の発足時に臨政との法的連続性を主張して、多くの大倭教徒を政府の要職に引

- き入れた。李承晩が組閣した初代内閣の閣僚のうち、副大統領の李始榮をはじめ、李範奭（國務總理兼国防長官）、李仁（法務長官）、安浩相（文教部長官）、李青天（国防委員長）、明濟世（審計院長）、鄭寅普（監察委員長）、申性模（第二代国防部長官）が大宗教教徒であった（佐々充昭、前掲『朝鮮近代における大宗教の創設』一四〇五頁）。このような事実は、李承晩が解放前の臨政時代から大宗教教徒と深い関わりを有していたことを示している。
- (43) 南坡朴賛翊伝記刊行委員会編『南坡朴賛翊伝記』（乙酉文化社、一九八九年、一六一頁）。
- (44) 朴賛翊の経歴に関しては、前掲『南坡朴賛翊伝記』と朴英晩『南坡朴賛翊先生の生涯…추억들』（新太陽社出版局、一九六三年）を参照。また、大宗教徒としての朴賛翊の活動に関しては、『六十年史』『南坡道兄の教会葬』（六二七～六三九頁）に詳しい。
- (45) 息子の朴英晩の証言による（朴英晩『한강물 다시 흐르고…朴英晩自叙伝』韓国独立有功者協会監修、二〇〇五年、八八頁）。
- (46) 森悦子、前掲『中国護法政府の大韓民国臨時政府正式承認問題について』八四～五頁。
- (47) これと関連する代表的な研究として、裴京漢「孫文과 上海韓國臨時政府—申圭植의 広州訪問과 広東護法政府의 韓國臨時政府承認問題를 中心으로」、『東洋史学研究』五六、一九九六年）、裴京漢『孫文과 韓國』（한울아카데미、二〇〇八年）、裴京漢『二〇世紀韓中關係史研究』（一潮閣、二〇二四年）、韓詩俊「大韓民国臨時政府と広州の關係」（『韓國獨立運動史研究』四五、二〇一三年）、이재호「大韓民国臨時政府의 護法政府와의 外交關係檢討」（『韓國獨立運動史研究』五二、二〇一五年）、劉霞・牛林杰「中国亡命時期 申圭植의 中国認識」（『韓國學研究』四三、二〇一六年）、金喜坤「太平洋會議과 申圭植」（『東洋學』八七、二〇二二年）、양지선「晚靚申圭植과 中国革命派의 連帶活動에 대한 再考」（『東洋學』九五、二〇二四年）などがある。
- (48) 森悦子、前掲『中国護法政府の大韓民国臨時政府正式承認問題について』七一頁。
- (49) 陳錫祺主編『孫中山年譜長編』下冊（中華書局、二〇〇三年、一三八二頁）。
- (50) 韓詩俊、前掲『大韓民国臨時政府と広州の關係』一二～一三頁。
- (51) 閔弼鎬「韓・中外交史話」（前掲『韓國魂』八八頁）。なお、中国語文献では若干表現が異なっており、第一条の最後に「並尊重其元首及國權」と記されている（閔石麟「中國護法政府承認韓國臨時政府始末實紀」前掲『革命文獻』第七輯、九八六頁、「中國護法政府訪問記」前掲『韓國魂暨兒目涙』一〇三頁）。
- (52) 閔弼鎬「韓・中外交史話」の第四章「孫大總統会见記」（前掲『韓國魂』八三～九四頁）参照。
- (53) 劉紹唐主編『民國大事日誌』第一冊、臺北：傳記文學雜誌社、一九七三年、一九九頁。韓詩俊、前掲『大韓民国臨時政府と広州の關係』一四頁より引用。
- (54) 裴京漢、前掲『孫文과 韓國』八七頁。
- (55) 閔石麟、前掲『中國護法政府承認韓國臨時政府始末實紀』九九二頁、「中國護法政府訪問記」一〇九～一一〇頁。
- (56) 同右、九八七頁、一〇四頁。
- (57) 同右、九九〇頁、一〇八頁。
- (58) 「國會中朝鮮獨立提案」『民國日報』一九二一年二月五日付、第一～三面。
- (59) 姜英心、前掲『申圭植：時代를 앞서간 民族革命의 先覺者』一三五頁。
- (60) 韓詩俊、前掲『大韓民国臨時政府と広州の關係』一四頁。
- (61) 同右、九一～一〇頁。
- (62) 「此次汎太平洋會議、亦將派員前往參加、以資呼籲宣傳、尙請我大總統囑飭貴國代表與鄙方代表密切聯絡、以資呼應爲幸」（閔石麟、前掲『中國護法政府承認韓國臨時政府始末實紀』九八八頁、「中國護法政府訪問記」一〇五頁）。
- (63) 金喜坤、前掲『臨時政府時期의 大韓民国研究』八四頁、韓詩俊、前掲『大韓民国臨時政府と広州の關係』一三～一四頁。
- (64) 「太平洋會中韓國問題」『民國日報』一九二一年一〇月五日、「太平洋會議之韓國問題」『申報』一九二二年一〇月五日（韓詩俊、前掲『大韓民国臨時政府と広州の關係』七七頁を参照）。
- (65) 「不逞團關係雜件—鮮人ノ部—在支那各地（二）」、公第二三九号「中韓協會員會合決議ノ件」、発信者：藤田榮介（広東總領事）、受信者：内田康哉（外務大臣）、発信日：一九二一年一〇月二五日。
- (66) 森悦子、前掲『中国護法政府の大韓民国臨時政府正式承認問題について』八一頁。
- (67) 李範奭「鉄驥李範奭自伝…우리의 불」(三育出版社、一九九二年、八五頁)。
- (68) 同右、八二頁。
- (69) 解放後、一九四八年に大韓民国が樹立されると、李範奭は初代國務總理兼国防部長官に就任した。大韓民国初代文教部長官をつとめた安浩相は、李

範奭が大倭教徒であったことを証言している。安浩相「軍人・政治人・独立闘士로서의 鉄驥」(鉄驥李範奭將軍記念事業会編『鉄驥李範奭評伝』三育出版社、一九九二年、七六頁)。

(70) 『独立新聞』一九二二年陽一〇月一二日付、第三面一段「故申圭植氏葬儀」。

(71) 『独立新聞』一九二二年陽九月三〇日付、第三面一段「申圭植先生長逝」。

(72) 『東亜日報』一九二二年九月二八日付、第三面一段「櫛風沐雨四十年」。同
一九二二年一〇月二日付、第三面一段「窓外の秋雨ぞ 蕭々」では、大倭教南道本司で行われた申圭植追悼式の様子が報道された。

(73) 尹潁善と臨政の關係に関しては、召容회「海葦 尹潁善과 上海臨時政府」(『韓國政治外交史論叢』第四三輯二号、二〇二二年)を参照。

(74) 息子である朴英俊も「父は陳果夫(国民党組織部長と文教部長官を歴任)

の紹介により中国国民党国際部宣伝課で働いた」(朴英俊、前掲『한강물 다시 흐르고…朴英俊自叙伝』七一頁)と証言している。

(75) 以上は『六十年史』に掲載されている「司教朴南坡道兄略史」(六三五～六三九頁)を参照した。今後、中国側の資料と照合した詳しい検証が必要であろう。

(76) 朴英俊、前掲『한강물 다시 흐르고…朴英俊自叙伝』三〇九～三一〇頁。

(本研究は、JFE21世紀財団二〇二四年度アジア歴史研究助成を受けたものである。)

(本学文学部教授)